『ゆけむり史学』の発刊を祝う

田村憲美

この刊行物の母体となっている別府大学大学院歴史学専攻の「院生報告会」というのは、在籍する学生諸氏が、日本史・西洋史・東洋史の分野や指導教員の枠をこえて、自分たちの仕事の結果や途中経過を発表しあう場として、運営している研究会である。月一～二回、報告者の募集・選定や日程に会場の設営、司会にいたるまで、大学院学生の世話役の方々を中心に、自主的に行われ、参加者も院生全員とはさすがにいかないが、毎回十数名は数えるようで、なかなか盛会である。教員も毎回数名の参加がなかったときはないようだ。

さっきから「ようだ」を繰り返しているのは、私が毎回参加というわけでないからである。教員である私は、開催通知を受け取るたびに、参加できないときには、胸の痛みを覚える。しかし、この報告会に参加するのは、本当のところ、教員としても実に面白い。普段は聞けない他専攻のテーマを知るのは貴重な機会だし、内容や出来がよければ、啓発されることも一再ではない。教員が参加されているときには、質疑・討論は教員の発言が多くなることもあるが、それは私にとっては、期せずして、大学院の教授研修（FD）というやつ）を受けているようなものである。学生諸氏相互の質疑・発言もときに本質をついていたり、ときに辛辣であったり、感心することが少なくなく、有益である。ここから類推すれば、学生諸氏相互の啓発効果はうたがえない。

大学院が発足したときから、こういう会があればよいと考えていたので、ほかの教員の方々とともに、当時の何人かの学生に勧めてみたのが、はじまりだったかと思う。もちろん、勧めただけではどうにもならないわけで、実際の活動が活発になったについては、その後に会を主導された黒木敏弘氏（西洋史専攻）、津坂政貢氏（東洋史専攻）、内田鉄平氏（日本史専攻）らをはじめとする学生諸氏の努力の賜物である。現在、在籍している学生諸氏は記憶されていないであろうから、特に記しておきたい。

私が教員として、この会の活動について貢献を自慢したいのは、次のことである。学生諸氏が運営方法を模索されていたときに、堅苦しくなく、出席も自由で、たとえばお茶菓子を食べながらやってはどうか、と意見をのべたことがあった。諸氏はこの意見を採用してくださって、とりわけ、茶菓子については各種、豊富に用意された。報告会名物のどら焼き、みたらし団子は参加者の維持におおいに貢献したと信じている。少なくとも私個人はそうだ。

会での報告は、多くの修士論文や博士論文に結実してきた。発表されない、よい結果や着想もあったにちがいない。また、普段の研究での感想や思い出も記録される機会をまっていると思う。どうか、大学院生の主体的な編集による『ゆけむり史学』が、この地に湧き出す『ゆけむり』の自由と豊かさを体現するものになりますように。